

トマス『真理論』第二問

神の知について

第二項

第二に、神は自己自身を認識するか、ないし知るかが問われる。

認識しないと思われる。

〔異論一〕知るものはそれ自身の知識により知られる者に関わる。ところが、ボエティウスが『三位一体論』で言うように、神性において本質は一性を含み、関係が三性を多数化する。それゆえ、神において知られるものは、知るものからペルソナとして区別されていなければならない。ところが神性におけるペルソナの区別は、相互的な語り方を許容しない。たとえば父は子を生んだからといって自分を生んだとは言われない。それゆえ、神において自分を知ることを認めるべきではない。

ボエティウス『どのようにして三性は一なる神であり、三なる神ではないか』第六章いかなる関係もそれ自身に関係することはできない。だから、関係的でないことがそれ自体についての述語であり、三性の多数性は関係の述語において成立する。そして一性が保たれるのは、実体について、働きについて、自体的に語られる述語について無差別であることにおいてである。このようにして実体は一性を含み、関係は三性を多数化する。

〔異論二〕さらに、『原因論』で次のように言われている。「すべて自らの本質を知るものは、完全な回帰によって自らの本質に帰るものである。」ところが神は自らの本質に帰るのではない。自らの本質から出ることにはけっしてないし、離別が先行していないところには回帰もありえないからである。それゆえ、神は自らの本質を知ることはなく、自分を知らない。

〔異論三〕さらに、知識は知るものの知られる事物への類同化である。ところが何も自分に似ているものはない。なぜなら、類似は自分にとってではないからである。これはヒラリーウスが言っていることである。それゆえ、神は自分を知らない。

〔異論四〕さらに、知は普遍について以外にはない。ところが神は普遍ではない。というのは、普遍はすべて抽象によるが、神はもっとも単純であるので、神からの抽象はありえないからである。それゆえ、神は自己自身を認識しない。

【異論五】さらに、もし神が自己を知るのであれば、自己を知性認識したはずである。知性認識は知より単純であり、それゆえ神に、より帰属させられるべきだからである。ところが神は自己を知性認識しない。それゆえ、自己を知ることもない。小前提の証明：アウグスティヌスは『八十三問題集』第十六問で、言う。「すべて自分を知性認識するものは、自分を把握する。」しかるに、有限なもの以外に把握されるものはない。これはアウグスティヌスの同じ箇所から明らかである。それゆえ、神は自己を知性認識しない。

【異論六】さらに、アウグスティヌスは同じ箇所で次のように論じている。「われわれの知性も無限であることを望まない。無限であることもできるが、自己に知られていることを望むからである。」このことから、自己を知ることを望んでいるものは、自己が無限であることを望んでいないことになる。ところが神は自己が無限であることを望んでいる。なぜなら、神は無限だからである。というのも、何か自己がそうであることを望んでいない何かであるものが存在するなら、そのものは最高度に幸福ではないことになる。それゆえ、神は自分に知られていることを望んでいない。それゆえ、自己を認識しない。

【異論七】しかし、神は端的に無限であり、自己が端的に無限であることを望んでいるが、自己にとって無限ではなく有限であり、その通りにまた自己が無限であることを望んでもいない、と言われた。——しかし、これに対しては、『自然学』第三巻で言われているように、何かが無限であると言われるのは、通過できないことにより、有限であると言われるのは通過可能であることによる。しかし、『自然学』第六巻で証明されているように、無限なものは有限なものによっても無限なものによっても、通過されえない。それゆえ神は、無限であるとした場合、自己自身にとって有限ではありえない。

【異論八】さらに、神にとって善いものは端的に善い。それゆえ、神にとって無限であるものも端的に無限である。ところが、神は端的に有限ではない。それゆえ、神は自己自身にとって有限ではない。

【異論九】さらに、神は自己自身に見合った仕方では自己を認識しない。それゆえ、もし自己自身に対して有限であるなら、自己自身を有限な仕方では認識するであろう。しかし、神は有限ではない。それゆえ、神は自己を、自己があるのとは別の仕方では認識することになり、このようにして自己自身について偽なる認識をもつことになる。

【異論十】さらに、神を知るもの同士で、一方の認識の仕方が他方の認識の仕方を超えていることによって、一方が他方よりよく認識する。ところが神は、神を認識する何か他のものより無限によりよく自己を認識する。それゆえ、神が自己を認識する仕方は無限である。

したがって、神は自己自身を無限な仕方では認識し、このようにして神は自己にとって有限ではない。

【異論十一】さらに、アウグスティヌスは『八十三問題集』で、ある事物を一方が他方よりよりよく知性認識することはできないことを次のように証明している。「誰でも、何かをそれがあるとは別の仕方では知性認識しているひとは欺かれている。そして、欺かれているひとは欺かれているそのことを知性認識していない。それゆえ、何かをそれがあるとは別の仕方では知性認識しているひとは、その事物を知性認識していない。だから、何であれ、あるとは別の仕方では知性認識されることはありえない。」それゆえ、事物はひとつの仕方であるのだから、すべてのひとによりひとつの仕方では知性認識されるのであり、いかなる事物も一方が他方よりよりよく知性認識することはない。それゆえ神が自己自身を知性認識したとしたら、誰か他のものが神を知性認識する以上に自己を知性認識することはなかったであろう。このようにして、あることがらに関して被造物が創造者と同等であることになるが、これは不合理である。

【反対異論】ディオニュシオスは『神名論』第七章で、「神の知恵は自己自身を認識することにおいて、他のすべてを認識する」といっている。それゆえ、神は、他のもの以上に自己自身を知っている。

【主文】何かは自己自身を知ると言われるとき、そのものは知るものであるとともに知られるものであると言われている。だから、神がどのような仕方では自己自身を知るかを考察するためには、何かはどのようなあり方によって知るものであり、知られるものであるかを見なければならない。

事物は二通りの仕方では完全であることが知らなければならない。ひとつの仕方では、そのものに固有の種によってそのものに適合する存在の完全性によって完全である。しかしながら、ひとつの事物の種的存在は他の事物の種的存在から区別されているから、どのような被造的物においても、それぞれの物におけるこのような完全性は、端的な完全性と比べるなら、他の種において見いだされる完全性の度合いだけ欠けている。このようにして、どのような物にあっても、そのものの単独に見られた完全性は、万有全体の完全性の部分として、不完全である。万有全体の完全性は、個々の物の完全性が互いにひとつとなって構成されている。それゆえ、このような不完全性に対し、被造物におけるもうひとつの仕方では完全性が一種の補完機能を果たしているのが見いだされるのであり、これはある物に固有の完全性が他の物において見いだされることによる完全性である。認識するものであるかぎりの認識するものの完全性は、このような完全性である。何かは認識するものにより認識されるのは、認識されるものがある仕方では認識するものにおいてあることによるからである。それゆえ、『デ・アニマ』第三巻で「魂はある仕方では、すべてである」といわれている。

魂はすべてを認識するような本性をもっているからである。このような仕方、ひとつの事物において万有全体の完全性が存在しうる。だから、哲学者たちによれば、魂が到達できる究極の完全性は、万有全体とその諸原因の秩序の全体が魂に書き写されることであり、彼らはこのことに人間の究極目的もおいたのである。われわれによれば、究極目的が存するのは神を見ることにおいてであるといえよう。というのも、グレゴリウスによるなら、「すべてを見ている方を見ているものたちの見ていないものが何かあるだろうか。」

ある事物の完全性は、他において、それがその事物においてもっていた確定された存在によって存在することはできない。したがって、他の事物において存在することができるあり方のためには、その事物を限定するあり方から切り離して、事物を考察しなければならない。事物の完全性や形相が限定されるのは質料によってであるから、事物は質料から分離されることによって、認識可能である。したがって、そのような事物の完全性がそこに受けとられるものは、非質料的でなければならない。もし質料的であったなら、完全性は何らかの限定された存在にしたがってそこに受けとられたであろうし、認識されうるものであるかぎりにおいてそこにあるのではなかったであろう。すなわちひとつの事物の完全性でありながら、他のものにおいて存在することができるようなあり方をしているのではなかったであろう。

このゆえに、昔の哲学者たちのなかには誤って、似たものにより似たものが知られるとした人々がいた。すべてを認識する魂は質料的にすべてから構成されており、土によって土を水によって水を認識するといったように考えようとしたためである。認識される事物の完全性が、それぞれの固有の本性において限定された存在において認識するもの内に存在しなければならないと考えたからである。しかしながら認識される事物の存在はこのような仕方、認識するものに受けとられるのではない。だから注釈者も『デ・アニマ』第三巻で、形相が可能知性に受けとられる仕方と第一質料に受けとられる仕方とは同じではない、認識する知性においては非質料的な仕方、受けとられるからであるといっているのである。だから、われわれは、事物において、非質料的なあり方の段階において、それらのものに認識する本性があることを認めるのである。植物やそれ以下のものは、非質料的な仕方では何も受けとることができず、したがってどのような認識ももたないのである。これは『デ・アニマ』第二巻に明らかである。感覚は、形相を質料なしに受けとることができるが、質料的な制約なしに受けとることはできない。ところが知性は質料的な制約からも免れた形相を受けとることができる。認識されるもののあり方の段階についても同じようにいうことができる。質料的な事物は、注釈者が言うように、われわれがそれらを可知的にすることがなければ、可知的にはならない。それらは可能態においてのみ可知的であり、能動知性の光によって可知的とされるのだからである。ちょうど色が太陽の光によって現実的に見られうるものとされるように。しかし非質料的な事物はそれ自体によって可知的であるから、われわれにとってはより少なく知られるものであるとしても、本性的にはより知られるものである。

さて、神は質料からの分離の究極にある。あらゆる可能性から完全に免れているからである。それゆえ、神は最高度に認識しうるものであるとともに、最高度に認識されうるもので

あることになる。だから神の本性は、実在的に存在をもっていることにおいて、認識されうる可能性のラチオが適合する。そして神は自らの本性が自己自身にとってあることにおいて神であるのだから、自らの本性が最高度に認識しうるものにとってあることにおいて認識する。だからアウィセンナはその『形而上学』において、「自らの何性が自身であるところの事物のはぎ去られた（すなわち質料から）たものであることによって、自らを知性認識し把握するものである。」といている。

【異論解答一】それゆえ、第一に対しては次のようにいわなければならない。ペルソナの三一性は、神性において、神において実在的にある関係、すなわち起源ね関係によって多数化される。ところが神が自己自身を知るといわれるときに暗示されている何らかの実在的關係ではなく、ラチオの関係である。同じものがそれ自身へと関係づけられるときはいつも、そのような関係は事物におけるなにかではなく、ラチオにおける関係にすぎない。実在的關係は二つの項を必要としているからである。

【異論解答二】第二に対しては次のようにいわなければならない。自己を知るものは自己の本質へと帰るといいう語り方は比喩的な語り方である。知性認識においては、『自然学』第七巻で証明されているように、動はない。だから、ことがらに即して語るなら、そこには回帰とか帰還はなく、発出とか動といわれるのは、ひとつの認識されうるものから別の認識されうるものへと到達されるかぎりにおいてである。そしてわれわれの場合、魂が自己自身を知るとき、推論という一種の移動によるのであり、これによって魂は自己から出て、自己へと帰る。すなわち最初に、自己から出る働きは対象を終極としてそこに至り、つぎに働きへと折り返し、最後に能力と本質に及ぶ。働きは対象を手がかりに知られ、能力は働きを通して知られるからである。しかし神の認識においては、先に語られたように、知られたものから知られていないものに至るといった移動はいっさいない。しかし、認識されうるものの側からは、神の認識に一種の循環を認めることができる。すなわち神は自己の本質を知るものとして、他の事物をも見ているからであり、それらの事物において自己の本質への類似を見ているのである。このようにして、ある意味で、自己の本質へと帰る。しかしそれは、われわれの魂において起こるように、他の事物から自己の本質を知るものとしてではない。ところでしかし、『原因論』にある自己の本質への回帰は、事物のそれ自身における自存以外のことを意味していないということを知らなければならない。というのは、それ自体において自存しない形相は他のものに注がれてそれ自身へと集められることはけっしてないが、それ自体で自存する形相は他の事物に注がれ、それらを完成し、それらにそれ自身によりそれ自身においてとどまることを与えるからである。このような仕方では神は最高度にそれ自身の本質へと回帰する。すべてのもののために配慮し、このことによってある意味ですべてへと出て行き、発出しつつそれ自身においてとどまり他と混ざることなくとどまっているからである。